国土交通省 関東地方整備局
荒川上流河川事務所

旧中山道と荒川　～戸田で荒川を渡り、熊谷で再会～

陸運の中山道、水運の荒川、交差しながら江戸と各地を結んでいました。

荒川上流部改修から100年 1918-2018

岐阻道中熊谷宿八丁堤景

中山道と荒川

久下の長土手

中山道とは

江戸時代の中山道は、日本橋から京都・三条大橋までの67宿69次、全長約135里（約530km）。埼玉県では、埼玉の中山道の玄関口となる戸田で荒川を渡り、蕨、浦和、大宮、桶川を通ります。鴻巣の吹上から熊谷手前の久下までは荒川の土手沿いを通り、本庄の勅使河原を経た戸田から本庄までの約19里（約75km）が埼玉県下の道程です。

渓斎英泉が熊谷宿を描いた浮世絵「八丁堤景」では、奥に荒川が見え、右上には熊谷堤が描かれており、道しるべには「右　おしげうだ（忍行田）」「左　深谷二里廿丁」とあります。

▶ 戸田の渡し

江戸時代、荒川には江戸防衛の意から橋が架けられず、人々は荒川を越えるには船による渡しに頼らざるを得ませんでした。

中山道では板橋と戸田の間に「戸田の渡し」が設けられ荒川を渡っていました。

戸田の渡しは現在の戸田橋の100mほど下流に位置し、1875（明治8）年5月に木橋の戸田橋が架けられるまで続きました。

木曽街道蕨之駅　戸田川渡

戸田渡船場跡碑

▶ 久下の長土手

吹上（鴻巣市）から久下（熊谷市）を抜ける中山道の荒川堤は「久下の長土手」、「八丁の堤」と呼ばれていました。その距離は約２.５キロにのぼりました。

久下の長土手の始まりに久下一里塚跡があります。日本橋から１４里目（約５２km）に当たり、中山道が堤防の中腹を通っていたことを示す史跡です。

江戸幕府は日本橋を起点に、中山道など主要な街道沿いに旅の道のりの目印とするため、一里（約４km）ごとに一里塚を設けていました。

久下の一里塚跡

八丁の一里塚跡

コラム　荒川の西遷の目的の一つは、中山道の交通確保と言われています

現在の荒川の流路は、江戸時代初期に行われた土木事業によってその原型が形づくられました。荒川はその名のとおり「荒ぶる川」であり、扇状地末端の熊谷付近より下流で、しばしば流路を変えていました。関東平野の開発は、氾濫・乱流を繰り返す川を治め、いかに川の水を利用するかにかかっていました。そのため、江戸時代の1629（寛永6）年、伊奈忠治が荒川を利根川から分離する付け替え工事を始めました。

現在「荒川の西遷」と呼ばれるこの河川改修事業は、中山道の交通確保、の他、埼玉平野の東部を洪水から守り新田開発を促進すること、熊谷・行田などの古い水田地帯を守ること、木材を運ぶ舟運の開発、さらに江戸の洪水の防御などを目的にしていたと言われています。

アクセス

久下の一里塚跡
交通：ＪＲ高崎線「行田駅」下車、
　　徒歩約５分
住所：埼玉県熊谷市久下地先

本陣跡
交通：ＪＲ高崎線「熊谷駅」下車、
　　徒歩約１０分
住所：埼玉県熊谷市本町１丁目

久下の長土手周辺図

出典　国立国会図書館「岐阻道中熊谷宿八丁堤景」／／埼玉県立かわの博物館「木曽街道蕨之駅　戸田川渡」／熊谷市HP／大宮国道事務所HP／

荒川上流部改修100年の詳しい情報はこちら→